現 代 英 語 発 音

(Current English Pronunciation)

小 栗 敬 三　Keizo OGURI

What is current English pronunciation? With a view to finding an answer to this question, the present writer has made a careful survey of Prof. Jones' new edition of "English Pronouncing Dictionary (1956)", comparing it with the edition of 1950. This issue, containing 58,000 words, is completely revised, enlarged and reset, and has several important innovations. As can be seen in the new introduction of the mark [˘] in [ĭə], [ŭə], etc., the general tendency is towards narrow transcription.

The following are some of the minor points which the present writer finds it hard to understand. (Are they misprints?) What is the reason for the notation of "sewer" [sjúə] having a stress mark? It is a diphthong, so it must be either [sjuə] or [sjúːə]. As for "saturate", the misprint in the previous edition is corrected, and we have [sǽtʃəreit], but there is no adjective form [sǽtʃərit].

Prof. Jones states in the Introduction that "the book is a record of facts". The big problem, however, is how to treat the "facts". Is there not a certain danger of a "fact" found among a small number of people being so treated and described as to give an impression of prevalent pronunciation? For instance, [əgén] (again) (second entry in the previous issue) is, according to the eminent phonetician, now so common that entry in the first place is required, and [əgéin] getting somewhat outdated, is listed as the secondary variant. It is true that a pronouncing dictionary cannot, from the nature of the book, be free from rough treatment (and so we can hardly hope for thorough exactitude and accuracy), but I, for one, should like to have a little more scientific data than what the author "hears" in his own circle, before accepting a judge's final decree "This is current English pronunciation".

(1) 序 (Introduction)
(2) ジョーンズ英語発音辞典 (Daniel Jones: English Pronouncing Dictionary)
(3) 疑問の表記 (Some Questionable Notations)
(4) 新語 (New Words)
(5) 米語発音の影響 (Influence of American Pronunciation)

(6) 綴字的発音の傾向 (Tendency to Spelling Pronunciation)
(7) 外国語の英語化 (Anglicizing of Foreign Words)
(8) [iə], [uə], etc.
(9) 強勢の推移 (Shift of Accent)
(10) 注目すべき発音の変化 (Some Notable Changes in Pronunciation)

1. 序

現代最も広く行われている（英国南部標準）英語の発音とはどういうものであろうか。いかなる方法でそれを正確に知り得るか。本稿では Jones 発音辞典新版を前の版 (1950) と比較して，その改訂箇所[1] を詳しく調べ，現代英語発音の実体をつかみたいと思う。

実際の発音を記録[2] するのに初めの版では十分の用意を以てなされたと推測するのであるが，比較的短い時間のうちに改訂がなされた新版では，はたしてどれだけの信頼すべき学問的精密さをもつて行われたのであろうか。第一線を引退して家に引こもつて著述をしている（ときく）Jones 教授自身が「きいた」[3] 範囲というのは一体どの程度に信用がおけるのか。そもそも発音辞典に 100 % 科学的精密と正確さを期待することが無理であろうが，それにしても改訂はある程度信頼すべき標準を基としてなされたものに違いない。その標準は何か。

それなら「君自身の発音は何を基準にするのか」ときかれたら，筆者は Jones 発音辞典[4] と答える外はない。何よりもたよりとするものであるだけにその権威に対する希望と注文が大きいのである。

2. Jones 英語発音辞典最新版[5]

巻頭の説明 (" Explanations ") が 28 頁から 42 頁と増加して詳細になり，本文も 490 頁から 538 頁になり，最後 4 頁は前になかつた Glossary of Phonetic Terms となつている。

本文では単語だけでなしに good morning, good evening, good day 等のような句も出ている。しかしその数は新版では増加していない。How do you do [háu dju

---

1) すべての改訂が時間の経過によつて生ずる発音の変化に応じて行われた改訂ばかりとは限らない。前の版の不備（及び misprint）を今度初めて訂正したものも含まれるからである。
2) The book is a record of facts, not of theories or personal preferences. (Introduction)
3) that (=the pronunciation) which I believe to be very usually heard in everyday speech in the families of Southern English people.....(Introduction)
4) 米語発音では J. S. Kenyon & T. A. Knott: A Pronouncing Dictionary of American English.
5) Daniel Jones: Everyman's English Pronouncing Dictionary, 11th edition (Completely revised, enlarged, brought up to date and reset and with a Glossary of Phonetic Terms) London: J. M. Dent & Sons Ltd, 1956.

dúː]6) のような例文で文強勢 (Sentence Stress) が示されているなら，of course のような句も掲げてほしい。f の発音の説明をききたいものである。

一つの単語で，最も別形 (Variants) が多いのは Rhodesia, Silesia 等であろう。組合せると 20 種になる。azure, luxurious もその次に多い方だ。

新版が甚だ見よいのは単に新活字使用のためだけでなく，アルファベットで各頁を改めており，又各語でも見出し (Entry) を別に改めて space の余裕を十分においたこと等の理由による。

St. を冠する固有名詞は全部一括して Saint の位置へ集めて並べたことは見易くなつており，Mac, Mc 等も同じ取扱いである。any の項を見ると，anybody, anyhow, anyone, anything, anyway(s), anywhere, anywise を各別行にし，なお any の項目では強形•弱形の説明を加えている。7) fire-, half-, life-, foot-, Fitz, coffee- 等も各複合語 (Compound Word) が別行になつたために旧版よりもずつと見よい。just も新版では adj. adv. と二つの項目にわけて説明する。例，just (adv.) [dʒʌst] (*rarely* dʒest)

又新版では連字 (合字) (Ligature) をやめて二字にはなしている。(もちろんこれは現代英語の一般的傾向である) 例，haemorrhage (別項 hemorrhage), [héməridʒ], Caedmon [kǽdmən], Caesar [síːzə], Aesop [íːsəp]

o e の連字の場合も同じで，phoenix, Phoebe, Phoenicia 等と綴られている。

3. 疑問の箇所

sewer (*drain*) [sjúə], (sjoə) の第一の表記では accent 記号はとるべきでないか。二重母母を認める以上は不必要であろう。これは旧版のままである。又は [sjúːə] と長母音記号 [ː] が入るべきだ。

saturate は旧版の misprint [sǽtʃərəit] は新版で [sǽtʃəreit] と改められているが，形容詞形 [sǽtʃərit] が見当らない。別見出しで掲げるべきである。

catholic [kǽθəlik] の variants 中，終りから二つ目の [·θlik] の l の下に成節子音 (Syllabic Consonant) を示す記号 [ˌ] が脱落している。8)

---

6) 本稿では印刷の都合上，Jones 式表記法を変更して，accent を母音の上にしるす方式を使用する。J. S. Kenyon, T. A. Knott 共著の米語発音辞典 (1949 年) を引用する場合も同じ。

7) 旧版 [éni] だけだが，新版では [éni] normal form, [əni] occasional weak form, [ni] occasional weak form after [t] or [d] と詳しくなつている。

8) 寛太郎氏は英語教育 (57 年 1 月号) で次の誤植を報告されている。dirge [dəːdʒ], mesh [meʃ] では不要なアクセントがあり，rotund [routʌ́nd] ではアクセント記号が第二アクセントになつており，daguerreotype, stereopticon, stereoscopic では綴りに e が脱落。その他若干。

4. 新 語

たとえ発音専門の辞典でも 1956 年版である以上は automation [ɔ̀:təméiʃən], cybernetics [sàibə:nétiks], cyclotron [sáiklətrɔn], entropy [éntrəpi], napalm [néipɑ:m] (nǽp-), nylon [náilən] (-lɔn) 等の新語が掲載されたのが当然で，中には今までになかつたのが怠慢だつたと思われるものもある。tycoon [taikú:n] (大君，将軍) 等の外来語のほかに onto [ɔ́ntu, ɔ́ntə] が初めてでたのは米語の影響か。aerodrome は旧版にもあるが，新しく airdrome がのせられ，又 air-condition 等も新顔である。音声学の用語 schwa [ʃwɑ:] も出た。

固有名詞では Conant [kɔ́nənt], Pulitzer [púlitsə] (米国の [pjú:-] とは違う), Pakistan [pà:kistá:n,-tǽn], Dairen [dairén], Djakarta [dʒəká:tə], Hiroshima [hìrɔʃí:mə] (hirɔ́ʃimə), Bikini [bikí:ni], Yalta [jǽltə], 略語 N.A.T.O [néitou] 等，新加入であるが，Tito, Nehru 等はまだでていない。Osaka は [ousá:kə], [ɔ́:səkə, ɔ́səkə] とあつて三番目のが一つ増えた。

従来巻末にあつた為に見逃すことが多かつた penicillin [pènisílin] (penís-), Auden [ɔ́:dn], (-dən), Eisenhower [áizənhàuə], Rio Grande [ri:ougrǽndi] (-grǽnd) が本文に入れられて見よくなつた。Tarzan [tá:zæn], (-zən) 等も同じ。Roading, Stoll 等の固有名詞は本文に入ると同時にずつと詳しい説明がつく。schizophreni aは旧版（巻末）の第一順序の [skàizoufrí:niə] がなくなり，第二の [skìtsoufrí:niə] が第一になり，他に variant として [skìdzou-,-njə] がある。

5. 米語発音の影響

次のような米国の固有名詞の場合では米語発音が英国にも行われ始めたと結論して差支えないであろう。

Connecticut 旧 [kənéktikət], (-nét-) は [kənétikət] 一つだけになつた[9]

Chicago 旧 [ʃ:ká:gou], (tʃik-)[10] から [ʃikɑ́:gou], (also [-kɔ́:gou] in imitation of one American pronunciation) となる。

Missouri 旧 [misúəri], (-sóər-),[11] 新 [mizúəri], (-zóər-, mis-) Note.—American pronunciation has [-z-].

---

9) Kenyon [kənétikət]—The British pronunciation [kənéktikət], based on the current erroneous spelling, has no American currency.

10) 旧註 Note.— [ʃikɔ́:gou] is frequent in America, but not usual in England.

11) 旧註 Pronounced miz- in America.

6. 綴字的発音 (Spelling Pronunciation)[12] の傾向

綴字になるべく近く発音するのが英米ともに最近の傾向と見なし得るが，新版でもこの傾向を示す改訂が多い。

Ski [ʃiː] は英米発音の差異を論ずる場合に英発音の代表としてよくあげられ，旧版では [ʃiː], (skiː) であるが，新版では [skiː], (ʃiː) となつていて，英国でも米語と同じく [skiː] と発音されることが多くなつたと考えてよい。[skiː] が英国でも第一の発音となれば，教室内の指導もずつとらくになり，学習者も助かる。

forehead, trait 等も綴字発音の好例であろうが，この方は全くそのままである。forehead [fɔ́rid], (-red, *rarely* fɔ́ːhed, fɔ́əhed)[13] の註の rarely が将来いつ消えるか興味がある。fivepence [fáifpəns] の [f] は次の無声音 [p] に同化 (Assimilate) された例であるが，新版に第二として始めて [fáivp-] が出たのは予想出来たことである。deliberate な発音では [f] よりも [v] となるであろう。blouse は [blauz] だけとなり，旧の付記 rarely [bluːz] が消えた。

again は [əgén], (-géin] となり，旧と第一が入れかわつた。米語発音と同じで，これはむしろ綴字的発音に逆の傾向をとつたわけだが，これなども何を根拠として変更したか，異論も多いことと思われる。against も同じ取扱いだ。よく用いられる単語であるだけに問題となろう。[14]

Anthony は新旧ともに [ǽntəni] だけで [-θ-] はなく，Bentham は旧 [bénθəm] が [béntəm], (-nθəm) となり，Waltham では [wɔ́ːltəm], (wɔ́l-, -lθəm) は変りはないが，Note として詳しい説明がついている。全般に，特に固有名詞に，詳しい説

---

12) これについては別に述べた。(1) 横浜国立大学紀要 (29 年 3 月)，(2) 岩崎教授記念論集 (29 年 12 月)。

13) h をよむ発音は Kenyon 米語発音辞典でも最後の順であるが，Colby 米語発音辞典によると，この発音は "is rapidly gaining ground in America and may soon prevail." である。

14) NBC Handbook of Pronunciation では [əgén] 一つを採用。米語発音で [əgén] が多いことは問題がないようである。ある英人の教授は [əgéin] の方が新しい発音と心得ていたと語つた。[əgéin] の方が文語的，poetic だと考える人が多いようだ。Walker's Rhyming Dictionary では ordain, disdain, fain, gain と chain, lain, plain, complain, explain, strain, slain, contain, ascertain の群の中間において [-ein] と押韻させているが，R, L. Stevenson の詩に then と押韻した例もある。

押韻の例，William Wordsworth

1. —But most of all, thou lordly Wain!
   I wish to have thee here *again*
   When windows flap and chimney roars,
   And all is dismal out of doors; (The Waggoner)
   ……
2. On the window pane bedropped with rain:
   Then, little Darling! sleep *again*,
   ……

明を新しくつけ又は行を増加して追記して利用者に対し親切になつているのは新版の長所である。Guy Fawkes は旧では [fɔks] もあつたが，新では [gáifɔ́:ks] だけ。

brougham は [brú(:)əm], (*old-fashioned* bru:m) となり，old-fashioned が付記され，固有名詞の Brougham の方は [brum (bru:m), brú:əm, bro*u*əm][15] となり，旧の [bru:m, brú(:)əm] よりずつと詳しく説明されている。Bohun は単なる [bu:n] から [bó*u*ən, bu:n][16] となつたが，この新しく入つた [bó*u*ən] は綴字的発音の傾向をもつものと言えよう。

falsehood が旧の [fɔ́:lshud],, (fɔ́ls-) に最後に (-sud) が加わつた。これも綴字的発音には反対であり，発音に於てもなかなか保守的な傾向があり，抵抗の少くないことを示すものであろうか。又は従来も行われていたのを，今回さらに精密に表記する方針の結果追加されたものか。他の一般の場合も同様であるが，説明がない限りはつきりしない。

仮名で示す場合にヘプバーンかヘボンかで問題になる Hepburn は新旧同じで，単に [hébə(:)n] だけであり，P が発音され得ることに未だなつていない。綴字的発音は将来の問題に残されている。Ralph (Christian name) は [reif, rælf] の二つとなり，旧の終りの二つ [rɑ:f, rɑ:lf] がない。(別に Ralph Cross が出ている) これでは一対一で，綴字的発音に対する反応はわからない。

7. 外来語[17] の英語化

外来語，特にフランス語 (後強勢) は英語化されて，英語特有の逆行強勢 (Recessive Accent) によつて，前強勢 (Fore-stress) になる。この変化が新しくどのように表記されているかに関心をもつたが，調べた結果は全く (といつてよいくらい) 変化がなかつた。僅かの期間では英語化の程度も知れたものなのであろう。

フランス語起源の「自動車車庫」garage の発音を大体英語化の度合の順に表記すれば次の如くなる。[gərá:ʒ, gərá:dʒ, gǽrɑ:ʒ, gǽrɑ:dʒ, gǽridʒ] 語尾の [ʒ] は元来フランス語に多い音で，英語化すれば [dʒ] である。米語発音の代表は原音に近い [gərá:ʒ] で，英語発音は Jones では [gǽrɑ:ʒ] である。[18]

prestige (名声) は Kenyon 辞典では [préstidʒ] が第一であるが，Jones では新旧変化なく [prestí:ʒ] 一つだけ (これはフランス語の原音に近い。)[19]

---

15) Note.—The present baron pronounces [brum]

16) これは次の付記がある。Note. — [bu:n] in B. Shaw's 'You never can tell,' 小さい misprint であるが you の前の quotation mark が accent 記号になつている。

17) 外国語の発音は旧版が独・仏に限つたのを新版では・伊・西・露その他を示す。

18) The fully Anglicized [gǽridʒ] is not general in American cultivated use. cf. carriage [kǽridʒ] (Kenyon 辞典 p. 180)

19) 正確に言えば母音 [i:] とか子音 [r] とかその音質に英米発音に差異があるから，全く同じとはいえぬ。

mirage [míraːʒ], (miráːʒ); camouflage [kǽmuflaːʒ], (-məf-);
sabotage [sǽbətaːʒ], (-bo*u*t-, -tidʒ)
いずれも表記に全く変化がない。
avalanche [ǽvəlaːnʃ], (-lɔːn*t*ʃ) には第二に [-laːntʃ] が入つた。
mademoiselle [mǽdəmzél] の他に，第二として [-məzél] がついた。
ラテン語系。alma-mater は大文字を用いた Alma Mater と書かれ，旧の [ǽlmə méitə] の他に第二として [-máːtə] が追加された。dramatis personae では元の [drǽmətis- pəːsóuniː] が第二になり，第一が [drǽːmətis- pəːsóunai] となつたのは注目に値する。
ドイツ語系。Nazi [náːtsi], (náːzi), Mozart [móutsaːt], (old-fashioned mo*u*záːt, məzáːt], Bach [baːx], (baːk) 等も変らない。
Van Goch[20] 新加入。[vǽngɔ́x], (.gɔ́k, -gɔ́f)
イタリー語から入つた音楽用語 intermezzo (間奏曲) は [intə(ː) métsou], (-médzo) としてあり，旧とは第一と第二が入れかわる。但し mezzo-soprano では [médzo*u*-səprǽːno], (métso*u*-) の順序は元のままで不変。Z の示す音はこの二例だけでは統一がない。
日本語起源の kimono は [kimóunou] だけが元のままで，第二の [kímən-] は消えた。なお saké [sáːki], samurai [sǽmuraɪ] は不変。[21]

8. [ĭə], [ŭə] 等の問題

Iones は最近の考えで [iə], [uə] の二つで弱音節の場合を区別する必要を感じて，[i], [u] の上に [˘] をつけた新記号を彼の著作 An Outline of English Phonetics (1950 年) 及び発音辞典新版で用いている。この二つが多く用いられるが，その他にも [ŭi], [ŏi], [ĕə], [ŏə] がある。これは強勢だけでなく，Prominence の問題にも関係がある。[ĭə] を例にとると，これは上昇二重母音 (Rising Diphthong) である，即ち後部が全部より大なる Prominence をもつ。それは [ə] が [i] よりも「きこえ」(Sonority) が大であるためである。(Outline p. 119)
[ŭə] の例, influence, confluence, affluence, contemptuous, habitual 等。
[ĭə] の例, happier, acrimonious, appropriate (adj.), burial, ceremonial, conciliatory, Confucius, curious, Darwinian, Eleonora, experience, Felicia, healthier, industrial, industrious,

---

20) misprint か？ 通常の綴りは Gogh [gou, gɔːk] 等の表記なし。
21) Yeddo [jédou] では (old name of Tokyo) の説明が加わつた。Satsuma は日本語か？ Webster 大辞典には orange の一種という説明も見られる。[sǽtsumə], (sætsúːmə) は旧と第一，第二が入れかわる。このあたりの変化も一体どんな data によるのか。なお Jones 式 accent で表示第二の方で t と s の中間に accent があるのは日本語発音としたらおかしい。[sæ'tsuːmə] である筈。

Marryat, material, 等。

次の語では第一の記号にはないが，第二，第三の別形に入つている。Athenian, Australia, Christian, convenient, Cordelia, courteous, dahlia, insatiable, Fabian, genius, meteor, nausea, Parisian, pneumonia, senior, tedium 等。

その他多くの例がある。

精密表記 Narrow Transcription (Notation) にも限度がある以上，ある程度までの精密さで妥協する必要がある。学術的著述である An Outline of English Phonetics でこれを使用し，これについての著者の意見を述べるのは当然である。しかし一般の使用を目的とする発音辞典[22]においても，これを使用しなければならぬほど重大であるかどうか。Jones は "an important innovation" (Preface viii) と自負するが，本稿の筆者は多少の疑問をもつ。[23] これを徹底させるなら，他の弱音節の [i] も当然新記号を用うるべきではないか。

"invisibility" という語は [i] が多くあつて強弱の [i] の発音練習に適当な語であるが，記号は一つの [i] ですませている。但し第三の i を [ə] で示す。[invìzəbíliti], (ínvìzə-, -zi-, -ləti) 他の弱音節の [i] をも [i] に似た新記号を用うべきであろう。その必要がないとすれば，happier, influence も従来のままにしておいても，強弱の差異をよく心得ていて正しく発音すればよいのではなかろうか。

弱音節の i に [ə] を多く記しているのが新版の一特色である。acidity, acridity, activity では従来と同じく，[ə] がないが，同じ短い語でも ability [əbíliti], (-lət-), possibility [pɔ̀səbíliti], (-sib-, -lət-), mobility [mo*u*bíliti], (mə-, -lət-) 等では [ə] がある。綴りが長い語では [ə] が多くあらわれる。[24]

弱音節の "o"

新版では弱音節の [o] の使用が少ない。[25] 例えば revokable は [révəkəbl] (-vuk) であり，旧版の第二の [-vok-] がなく [-vuk-] になつている。prohibit は [prəhíbit], (prou-, pru-] で，旧の [pro-] が [pro*u*] となる。この o → o*u* の例は多い。

Beowulf, brocade, aeroplane, agonize, Aphrodite, approbation, democrat, diplomat, homophone, interrogate, Yokohama

---

22) a work of reference for English-speaking people as well as for foreign learners (Introduction).

23) [ĭə] を例にとると Jones 自身も次のように言つている。The exact nature of [ĭə] is difficult to establish. (Outline P. 119). It is probable that many English people do not distinguish [iə] from [ĭə] at all, at any rate in quick speech. (Do. P. 121) この微妙な程度の問題を外国人が注意することがどうして "preferable" であるか，理解出来ない。まして [əː] と [ɑː], [l] と [r] の区別すら満足に出来ない日本の学習者にとつては細かすぎる区別であり，その解説も本を読んだだけではわかりにくい。

24) acceptability, adaptability, admissibility, advisability, amenability, amiability, impenetrability, improvability, intangibility, invincivility, inviolability 等。

25) [o] を [ou] の variant として使用（元のように [ɔ], [ɔː] の variant として用いぬ）(Preface viii).

object (v-) は [əbdʒékt] だけで，旧の第二の [ob-] がなく，concur [kənkə́ː], conduct (*v.*) [kəndʌ́kt] でも第二の [kon-] がない。October は [ɔktóubə] 一つになり，offend, official, obsession では第二の [o-] が省かれている。compromise [kɔ́mprəmaiz], gorilla [gərílə], syncope [síŋkəpi], synonym [sínənim] 等では各第二選択で，旧版の [-prom-, -prum-], [gor-], [-kop-], [-non-] が [-prum-], [gur-], [-kup-], [-nɔn-, -nun-] となつている。advocate (*v.*) [ǽdvəkeit], (-vok-) は [ǽdvəkeit], (-vuk-) と，同じく第二の表記が改められている。confederation, congratulate, condition 等では第一だけで，第二の [-kon-] がけずられた。[26]

[o] と [ə] との差異はごく僅かなので，出来得る限り簡易表記 Broad Transcription を使用する意味で，[o]の使用が少いのは賛成であるが，前記の [ĭə], [ŭə] の新記号を設けたことと相反する傾向になりそうである。日本の英語教育では [ĭə], [ŭə́] 等のように上に [˘] をつけた新記号も [o] も，ともに使用する必要がないと考える。

9. 強勢の推移 (Shift)

強勢の変化といつても根本的変化はなく第一順位と第二順位の入れかわり程度である。

aggrandize	əgrǽndaiz	ǽgrəndaiz
atoll	ǽtɔl	ətɔ́l
compensative[27]	kèmpénsətiv	kɔ́mpenseitə́ri-, kɔ́mpən-
infiltrate	ínfiltreit	infíltreit

以上の例は旧版と一，二が入れかわる。

	新，第一	旧，第一
automobile[28]	ɔ́ːtəmobiːl	ɔːtəmóubiːl
television	télivizən	télivízən

名詞，動詞同形の場合の accent には英語学習者は相当になやまされる。いつも名詞は前強勢，動詞は後強勢ときまれば大助かりであるが，そうはいかない。[29] すくなくとも今後の変化はこの方向に進んでほしいのだが，それも注文通りにはいかないらしい。

---

26) condolence 旧 [kəndóuləns], (kon-, *rarely* kɔ́ndələns], 新 [kəndóuləns], (kɔ́ndələns)

27) compensatory もこれに準ずる。

28) 旧版も五種類の表記があつたが，時代の進歩に応じ自動車の種類の増加に比例したわけでもなかろうが，発音記号も増加して十二種の表記になり，ou を o と細分すればあと四種ふえる。これだけ variants があれば，何と発音してもどれかに該当しそうである。(第二音節に強勢をおかない限りは)

29) 名，動ともに前強勢の例，contact, balance, benefit, exercise, compromise, prelude, purchase, profit, remedy, rescue 等，
ともに後強勢の例。command, control, lament, dispute, distress, report, resort, surprise, supply, support, accord, array, concern, express, delay, regret, neglect, regard, dismay, caress, finance 等

increase (*n.*)	ínkri:s	(íŋk-)
increase (*v.*)	inkrí:s	(iŋk-)

上記は旧版の表記で，decrease と共に名前動後の accent 規則の代表的例と考えるべきものであろうが，新版では variant として *n.* に後，v. に前強勢が入つている。decrease の場合には旧版でも既にあつたが，新版でも n. 後，v. 前強勢の表記も併せて出してある。import, export も同じく代表的例と考えられているが，新版では import (*v.*) に rarely [ímpɔ:t] が付記された。export は旧版では import と同じく名前動後の強勢だけであるが，新版では export (*v.*) に [ekspɔ́:t], (iks-, ékspɔ:t) としてあり，動詞の前アクセントが付記された。もつともこの動詞の前強勢には対照の強勢 (Contrast Stress)[30] の影響もあるであろう。

discharge[31] は旧版 n. v. ともに [distʃá:dʒ] であるが，新版では n. の第二に [dístʃɑ:dʒ] が加わつた。compliment は n. v. 前強勢のほかに v. 後強勢が第二としてつけられた。[32] [kɔ̀mpliménT]

exploit は v. [iksplɔ́it], (eks-) は変らないが，n. は旧 [iksplɔ́it, eks-] が消えて，[éksplɔit] だけになつたのは覚えやすくてよい。forecast は (*n.*) 前強勢は変化ないが，(*v.*) は旧の第一後強勢，第二前強勢が入れかわつて [fɔ́:-kɑ:st] (fɔ:kɑ́:st) となつた。

miscellany [misélənі] には新らしく [mísiləni] が付加された。米語発音と同じ第一音節強勢であるが，米語では第三音節に第二強勢がおかれて [mísəleini] となり，やや異なる。

vagary [véigəri] (vəgéəri) (気まぐれ，もの好き) は新旧は第一，第二が入れかわつている。gallant (*adj.*) の二つの意味による強勢の相違は英語教師が得意になつて教室で教えるものだが，brave の意味の [gǽlənt] は問題ないとして，amorous の意味では [gǽlənt], (*rarely* gəlǽnt)[33] であるから，共に第一音節強勢として今後教うべ

---

30) The number of boys in this school is increasing while that of girls is décreasing. upstairs and dównstairs; use and ábuse; likes and díslikes; happiness and únhappiness; loading and únloading; formal or ínformal: consciously or únconsciously; proper and ímproper; advantage and dísadvantage; internal and éxternal; índirectly as well as directly 以上の例で意味の差異を明瞭にするために普通は弱い第一音節に強勢 (少くとも均勢，平板 強勢 level stress, even stress) をおく。

31) discourse (*n.*) [diskɔ́:s], (dískɔ:s), (*v.*) 後強勢は旧と変らない。

32) compliment は *n v.* ともに前強勢であるが第三音節の母音が違う。[ə] と [e] *n.* [kɔ́mplimənt], *v.* [kɔ́mpliment] 類例，orient, experiment, supplement, ornament
comment 旧 (*n. v.*) [kɔ́ment] (*rarely* -mənt), 新 (*n.*) [kɔ́ment], (*v.*) [kɔ́ment], (-mənt, rarely kɔment, kəment) rarely とことわつてあるがそれが認められて一つ追記されると (*v.*) 後強勢が全く誤りとは言えなくなるので，発音教授上では注意を要する。しかし教室内では rare の場合を無視して第一強勢だけとして取扱つて差支えないと思う。

33) 旧版の註に rarely が加わつた。名詞の場合も同じく [gǽlənt], (rarely gəlǽnt) である。旧註では ladies' man の意味では [gəlǽnt]

きものである。magazine [mægəzíːn] は第一音節強勢はまれとことわり，註がつく。exquisite [ékskwizit] は変りがないが，第二順位の註に時の変化がわかる。[34] explicable の第二順位にも初めて註がつき，発音の生きている姿を知ることが出来る。[35]

10. 注目すべき発音の変化

重要な基本語から述べる。

cannot [kǽnɔt] に第二として (-nət) が追加。[36]

yes は従来の [jes], (jɛːs, jəːs, jeh) の他に二つ特殊形が追加。no [nou] は n. interj. の場合は同一だが，別項の adj. では [nou, no] の次に [nə] (in the expression "no more do I [we, etc.]") が追加された。tomorrow では Note が詳しくなり，[-ru] の例が追加された。

January [dʒǽnjuəri] が新版で四つに増加したのは複雑で，わずらわしい感じがないでもない。February [fébruəri] は記入が詳しくなり，他に [fébjuəri] もあることをのべる。Sunday, Monday [-i] 等に secondary variants として [-ei] が追加。[37]

my では註 (Note) が少々改められている。Many people confine the use of [mi] to the special expression "my lord" (*see* lord) and (at Eton College) to the expressions "my tutor" and "my dame" が加つている。milord の項目では旧の [milɔ́ːd] の次に (-lɔ́ːd) がついた。

dreamed [dremt], (drempt, *rarely* driːmd) と rarely が加わり，普通には [dremt] と発音すべきことを教える。long-lived [lɔ́ŋlívd] では (-láivd) が第二に加わつた。

handkerchief [hǽŋkətʃif] は変らないが，第二の形 [hǽŋkətʃiːf], *pl.* [-tʃiːfs,-tʃiːvz] についての註 (The use of these forms) seems to be on the increase が is becoming fairly common と改められて，時の動きを示している。because の註 (The use of [bikəz] and its abbreviated form [kəz]) is spreading rapidly が is becoming very common となつたのも同じく発音の移り変りを示して興味がある。decade は [dékeid] が第一となり，前の [dékəd] と入れかわつた。[dikéid] はまだ最後の順位である。

used to の場合，最後に (*rarely* [juːzd]) が入つた。従来も，次に to がきた場合

---

34) The forms [ekskwízit, ikskwízit] are becoming very common. 旧 seem to be becoming increasingly common.

35) [éksplikəbl], (eksplíkəbl, iksplíkəbl) The pronunciations with stress on the second syllable are becoming very common, and seem likely to supercede the other before long.

36) 短縮形 [kɑnt] は旧と同じ。

37) 旧註の There exists also a fairly common pronunciation [fébjuəri] まではそのままで，以下の which is considered incorrect by most teachers. がけずられている。
但し yesterday には元から第二に [-dei] があつた。

に [ju:s*t*] となると説明されていた。to の最初の無声音 [t] による同化 (Assimilation) の例である。直ぐあとに to がこないで，副詞等他の語が挿入された場合は [ju:zd] となるかとの疑問も生ずるが，この新説明によると，この場合でも [ju:st] が多いことがわかる。

moth は [mɔθ] 一つと簡単明白になり，旧註[38] がとれたのは予言の適中か。しかし先入主をもつて観察すれば，自分の考えと一致するような発音の傾向だけに気ずくこともあり得る。これは全般的に言えることだが，この一例だけでもどこまでに客観的の正確さをもつかが問題として残る。

resource [risɔ́:s], (rəs-) には新しく [-zɔ́:s, -ɔəs] が付記されたのは注目すべきだ。immobile [imóubail], Argentine [ɑ́:dʒəntain] は [-bi:l], [-ti:n] が各第二として付加されたのも一つの傾向が見られる。imitative は [ímitətiv], (-teit-) となつた。旧の [-ei-], (-ə-) が反対になつた -ative, -atory 等の語尾の語も注意を要する。[39]

idyll では第一，第二の順序が入れかわつて [ídil], (áid-) となる。patriot [péitriət], (pǽt-) も旧の [æ], (ei) が反対になつた。trial [tráiəl] も註がついた。[40]

stratosphere は旧 [stréito*u*sfiə] が変じて [strætou*s*fiə], (strɑ́:t-, *old-fashioned* stréit-) となり，いかにも日進月歩の科学界の術語らしい。

lieutenancy 新 (army) [lefténənsi], (ləf-), (navy) [leténənsi], (lət-, left-, ləft) は陸軍は同じたが，海軍は旧 [lu:ténənsi] から変つた。特に註では大変化がある。[41] lieutenant もこれと同じ。

do では doeth [dú(:)iθ] が新しく加わる。[42] caricature では旧の第一 [kǽrikətjúə] が新では第一 [kæ̀rikətjúə]，即ち第一音節に第二次強勢をおく点が変つた。financier (*v.*) は使用がまれとみえて，旧の [finænsíə] が消失し，(*n.*) [fainǽnsiə], [fin-, -sjə) だけになつた。

naive は整理されて [nɑ:í:v], (naií:v]) だけ。[43] revenue [révinju:], (rivénju:, rəvénju:) 説明は旧註と比較して "old-fashioned" が入つて変化を示し，Note は Shakespeare からの用例を示す。mandoline は [mæ̀ndəlí:n], (mǽndəli:n, mǽndəlin) となつて [o] のつく三つが省かれた。[44] acclimatization [-isa-] [əkláimətaizéi-

---

38) 旧 moth, -s [mɔθ], (mɔ:θ), [mɔθs], (mɔ:θs, mɔ:ðz) 註 The pronunciations with [ɔ:] are now old-fashioned and seem likely to disappear soon.

39) (Cf. Preface viii) 但し imaginative のように [imǽdʒinətiv] だけの語もある。

40) The reduced form [trail] is not used when the word is immediately followed by a word beginning with a vowel.

41) 旧註 The naval term is often pronouced [lef-] or [ləft-] by those unfamiliar with naval usage. 新註 Until recently, the usual pronunciation in the navy was [lu:tén-] or [lú:tnən-]. These forms appear to be now nearly obsolete in British English. cf. Kenyon [lu:tén-] 陸，海の区別なし。

42) doth は前からある。

43) 旧 naií:v (nɑ:í:v, náiiv, néiiv)

44) cf. mandolin [mǽndəlin]

ʃən] には第二にとして，始めて [-tiz] がついた。

geyser は元も別項目に説明されているが，新説明によつて hot spring の意味では [gáizə], apparatus for heating water では [gíːzə] であり，New Zealand ではともに [gáizə] であるとわかる。pastel は旧の一行が別項目五行にわたり，coloured crayon の場合は [pæstél], (pǽstel, -təl, -tl) と記す。

alternate (*adj.*) [ɔːltə́ːnit], (ɔl-, *rarely* æl-) は rarely が付記され，philistine (P-) [fílistain] には rarely [-tin] の付記が新しく加わつた。entirety [intáiəti], (en-) では新註[45] が興味がある。

11. 固有名詞

注目すべき発音の変化に Hazlitt がある。旧は [hǽzlit] だけであるが，新では第一に [héizlit] が入つて註がつく。普通には [-æ-] であるが，William Hazlitt 自身は [-ei-] と発音したという。[46] Pepys では註の新しく追加された部分 "Samuel Pepys is generally referred to as [piːps]." が参考になる。

Crusoe [krúːsou] には第二に [krúːzou] が付記。De Quincey は [dəkwínsi] だけになり，第二の [-nzi] は消失。Ulysses [ju(ː)lísiːz], (júːlisiːz) は変化がないが，第二に rarely がついた。

Lenin [lénin] の他に，第二として [léinin], なお原音 [ljénjin] が付記。Conan はずつと詳しい。(personal name) [kóunən, kɔ́nən], (place in Scotland) [kɔ́nən][47] Nobel は第一と第二とが入れかわり，rhythm stress のための強勢の移動までそえて詳しくなつた。[48] Eugene [júːdʒiːn, juːdʒíːn] の他に第一として (English name) [juːʒéin] が入り，註がつき，Eugen, Eugene Onegin は別項目で新しく入り，詳細な説明になつた。

Deighton [dáitn, déitn] は前に (surname) が入り，別に (place in Yorks) [díːtn] が追加。Dylan [dílən] には (dʌ́l-) (Welsh də́lan) が付記された。MacArthur は一つふえた。[49] Haydn (composer) は [háidn] だけとなり，旧の付記 old-fashioned [héidn] が削られた。

Mocha (mocha) は別項目となり，説明は一行から七行に増えた。大体 [móukə] だが，地名には [mɔ́kə] もある。Trafalgar [trəfǽlgə], (他に [trǽfəlgáː] となる場合あり) も説明が三行から九行に増加。Prague [prɑːg] の説明の変遷も興味が多

---

45) There exists also a form [intáiərəti], a quite recent innovation.

46) Cf. Galsworthy (註は新旧同じ) 一般に [gɔ́ːlzwəːði] だが，彼の family の発音は [gǽl-]

47) 新註 The members of the family of Sir Arthur Conan Doyle pronounce [kóunən]

48) (Swedish chemist) 「noubél] (also [nóubəl] in "Nobel prize")

49) これは Jones 式 accent 表記の特色を示す。即ち元の [mək'ɑːθə] の前に，(第一の順位に) [mə'kɑːθə] が新しくつく。この稿の表記此では元のが [mək-ɑ́ːθə] と hyphen を用いて区別出来よう。新は [məkɑ́ːθə」

い。[50] Kansas [kǽnzəs] には第二に (-nsəs) がつく。Arkansas (state, city, river) [ɑ́:kənsɔ:], (ɑ:kǽnzəs)[51] Montreal は第二の [mɔ́ntriɔ:l] が消え，第一の [mɔ̀ntriɔ́:l] だけになつた。

また Cecil, Hiram, Houston, Powis, Raleigh[52] 等いずれも variant 増加又は説明が詳しくなつた例である。Hassan, Rand 等は全く新しく記載されたものであり，Taunton 等の如く整理されて簡単になつたものも比較的少数だがある。但し Wriothesley の如く全く一変したものは類が少い。[53]

Gotham では多少変更がある。man of Gotham は元は [gɔ́təm], 新では [góutəm], New York の地名では [góuθəm, gɔ́θəm] となり，[θ] が綴字的発音になつている。原則として米語発音に綴字的発音の傾向が強い一例となろう。[54]

Shrewsbury は第一と第二との順序が反対になつて [ʃróuzbəri],[55] (ʃrú:z-) となる。Irene [airí:ni], (áiər-) には註 in modern use also [áiri:n], (áiər-) が追加された。[56]

以上で新版発音辞典が教える現代英語発音を検討してきたが，はたしてこの辞典が現代英語発音の "record of facts" なのであろうか？もつとも著者は "a record" といつて，"the record" とは言つていない。一つの事実は事実であつても，少数人間に行われる "fact" が prevalent であるような印象を与えていないかどうか。fact の取り上げかたが問題なのである。著者がすぐれた音声学者であることは認めるが，著者が限られた範囲内で "hear" したところを記録して書くのでは，学問的資料としてはどの程度まで信頼出来るであろうか。方法は困難であろうが，科学的精密性にもう少し近ずいた取扱が出来ないものか。これは発音辞典という特種の本の性質上必然的にもたねばならぬ欠陥なのであろうか。我々英語学習者は（特に目で本を読んで英語発音を学ぶ外国人にとつて発音辞典は何よりの典拠なので）不可抗力といつてもよい止むを得ざるある制限内に於て，十分の準備と注意を以て，出来るだけ科学的正確な方法によつて編纂された，望み得る限り最良の発音辞典の出現を願うものである。（了）

— April, 1957 —

---

50) 旧 old-fashioned [preig], 新註 There existed until recently a pronunciation [preig] which is now probably obsolete.

51) 元は (state) [ɑ́:kənsɔ:], (city) [ɑ:kǽnsəs], (-nzəs) 新註U.S.A. (新版では旧版の "America" がみな "U.S.A." となる) の普通の発音は [ɑ́rkənsɔ]

52) その他 Chillon Clanricarde, Gillingham, Harewood, Johannesburg, Jowett. Kabul, Kirkcaldy, Lisle, Lockhart, Loəb, Lydgate, Marham, Pontefract (廃 [pámfrit]), Raphael, Rhys, Ruthven [rívən] (その他), Ryswick, St. Augustine, St. Osyth, Salmon, Sierra Leone, Southwell, Sowerby, Stour, Talbot, Toledo

53) 旧 [rɔ́tsli], 新 [ráiəθsli] これも綴字的発音の傾向を示す一例。類例 Churchdown [tʃóuzn] →[tʃə́:tʃtaun], Cockwood [kɔ́kud]→[kɔ́kwud], Roding [rú:diŋ]→[róudiŋ]

54) 類例 Fenwick [fénik], [fénwik] (American surname)

55) -rew- [rou] は Roosevelt] と同じく，母音が r の調音に影響された発音であろう。

56) これは Kenyon の伝える米音 [airí:n] とも別物である。Kenyon は別に神話として [airí:ni] をのせている。